

開設目指す団体に予定地・田上町

「住民が不安」と反対

薬物依存症の リハビリ施設 対立で暗礁に

民間の薬物依存症リハビリ施設として全国に設けられている「DARC（ダルク）」を巡り、県内初の開設を目指している団体側と、予定地の田上町との間で対立が続いている。町の同意と理解を求めようとする団体に対し、町は「住民が不安に思っている」と反対を表明。話し合いの場がもたれないまま、こう着状態が続いている。

【畠山哲郎】

「単に排除しないで」

開設を進めているの「秋田ダルク」（秋田県大仙市）の平原薫代表（44）。新潟青陵大学の五十嵐愛子准教授らが支援し07年から準備を進めてきた。田上町羽生田に五十嵐准教授が購入した木造2階建て住宅に、スタッフを含め5人程度が入居する予定。

など連携してやってきた」とし、町の同意を得た上で設置したい考え。「不安に思うの

開を進めているの「秋田ダルク」（秋田県大仙市）の平原薫代表（44）。新潟青陵大学の五十嵐愛子准教授らが支援し07年から準備を進めてきた。田上町羽生田に五十嵐准教授が購入した木造2階建て住宅に、スタッフを含め5人程度が入居する予定。

厚生労働省や県医務薬事課によると、ダルクの開設にあたっては行政側の許可は不要で、町に開設を中止する法的権限はない。

平原代表は3月下旬、町側にダルク開設の説明を申し出たが、町側は「住民が反対し

平原代表は「（他県でも）これまでも行政

ダルク（DARC）

ドラッグ・ア
ディクション・
リハビリテーション・
センター（薬物依存リ
ハビリセンター）の略。

は理解できるとにか
く話を聞いてほしい」と話している。

これに対し、佐藤邦

自らも薬物依存症だった近藤恒夫代表が85年、民間のリハビリ施設として創設したのが始まり。薬物依存者らが共同生活を送りながらグループミーティングで薬物などの体験を話し合い、自然に自分を見つめさせる活動を続けている。全国に約50施設ある。

義町長（67）は「こうした施設があるほうがいいと理解をしているが、住宅地で通学路も

近くにあり、住民の不安が大きい」と話し、「私が会えば、町として開設を認めてしまうことになる」と話し合いには応じない方針だ。

日本ダルク本部の近藤恒夫代表（67）は「地域住民が反対するケースはこれまでにもあったが、間に行政が立つことで解決してきた。単に排除するのではなく、ダルクを受けとめて考えてほしい」と話している。



ダルクの施設に使用するため、支援者が購入した木造住宅。田上町羽生田で